特別教育プログラム

死生学・応用倫理教育プログラム

◇教員◇

専　任：堀江宗正、鈴木晃仁、井口高志、冨澤かな、古荘真敬、
乗立雄輝、会田薫子、早川正祐、田村未希

非常勤：福永真弓、村上靖彦、小川公代、轟孝夫、
北條勝貴、澤井敦、山田慎也、山本剛史

「死生学」は、死すべき存在である人間のあり方を見すえ、そこから生きることの意味を再考し、死を意識せざるを得ない人間を主題とする学問です。また、「応用倫理」は、現代社会のさまざまな場面で起きている諸問題に即して、私たちがどのような姿勢で、どのような対応をすべきかを考える営みです。科学と技術が我々の生活を飛躍的に便利にするに従い、これまでは考えられもしなかったさまざまな問題が生まれてきました。寿命を延ばすこと、生きることだけが価値があるとして、生物としての人間にとって不可避の死から目をそらしてきたわけですが、それは逆に人間の生の内実を貧弱にしてきたのではないか、という反省があります。果たして人間にとって科学技術とは何なのか、何であるべきなのか、また人間にとって生きることと死ぬことはどのようなものであるべきなのか、このような問いから発したのが、「死生学」であり「応用倫理」であると言えます。いずれも、その問いが包括的であることから、哲学、倫理学、宗教学、歴史学から、社会学、心理学、教育学、更に医学、看護学、法学、技術系の諸学問領域に至るまで、幅広い分野を包含することになります。

2011 年に発足した人文社会系研究科「死生学・応用倫理センター」は、死生学と応用倫理に関する学際的教育を構築するために、学部横断型の「死生学・応用倫理教育プログラム」を開設し、これらの分野に関する学際的な知識を有する学生の育成を行います。関心を有する学生諸君の積極的な参加を歓迎します。

「死生学・応用倫理教育プログラム」は必修科目（概論）、必修選択科目（演習）、選択科目の３種類の授業からなります。必修科目は「死生学概論」「応用倫理概論」の２講義４単位、必修選択科目は「死生学演習」「応用倫理演習」のうちから２単位、選択科目は６単位、計１２単位以上の履修に

より、修了が認定されます。修了者に対しては、東京大学教育運営委員会より修了証を付与します。

2025 年度の開講科目は、以下のとおりです。

□必修科目

担当教員	科目名	単位数
堀江宗正ほか	死生学概論（死生学の射程）	2
鈴木晃仁	応用倫理概論（応用倫理入門）	2

□選択必修科目

担当教員	科目名	単位数
早川正祐	死生学演習 I（病いの語りをめぐる倫理）	2
鈴木晃仁	死生学演習 II（患者の歴史と倫理 I）	2
冨澤かな	死生学演習 III（死後観念の研究とその展開）	2
会田薫子	応用倫理演習 I（質的研究法入門）	2
鈴木晃仁	応用倫理演習 II（患者の歴史と倫理 II）	2
井口高志	応用倫理演習 III（苦悩とケアの社会学（1））	2
冨澤かな	応用倫理演習 IV（歴史と宗教史）	2
井口高志	応用倫理演習 V（苦悩とケアの社会学（2））	2

□選択科目

担当教員	科目名	単位数
会田薫子	死生学特殊講義 I（臨床死生学・倫理学の諸問題 IX）	2
会田薫子	死生学特殊講義 II（臨床死生学・倫理学の諸問題 X）	2
会田薫子	死生学特殊講義 III（臨床死生学特論）	2
早川正祐	死生学特殊講義 IV（共感とケアの哲学）	2
早川正祐	死生学特殊講義 V（自律についての関係的なアプローチの展開：現代行為論・自由論の一展開）	2
早川正祐	死生学特殊講義 VI（認識をめぐる不正義と責任：現代認識論の一展開）	2

（次ページに続く）

担当教員	科目名	単位数
乗立雄輝	死生学特殊講義 VII (死生をめぐる諸問題についての偶然と確率の視点からの考察)	2
古荘真敬	死生学特殊講義 VIII (死生をめぐる実存哲学の諸問題)	2
堀江宗正	死生学特殊講義 IX (スピリチュアリティ研究)	2
山田慎也	死生学特殊講義 X (葬送儀礼の変容と死生観)	2
冨澤かな	死生学特殊講義 XI (死後観念の比較研究)	2
澤井敦	死生学特殊講義 XII (死と不安の社会学)	2
轟孝夫	応用倫理特殊講義 I (技術時代の倫理――ハイデガー哲学の視点から)	2
山本剛史	応用倫理特殊講義 II (環境倫理入門)	2
福永真弓	応用倫理特殊講義 III (食べることと環境の倫理)	2
村上靖彦	応用倫理特殊講義 IV (現象学的質的研究入門)	2
北條勝貴	応用倫理特殊講義 V (環境文化史から実践するパブリック・ヒストリー)	2
鈴木晃仁	応用倫理特殊講義 VI (医療者の歴史と倫理)	2
小川公代	応用倫理特殊講義 VII (ケアの倫理入門)	2
堀江宗正	応用倫理特殊講義 VIII (サステイナビリティ研究)	2
大塚類	教育臨床学概説	2
池田真理 佐藤伊織 森崎真由美	家族と健康	2
瀧本禎之	生命・医療倫理 I	2
根本圭介	技術倫理	1
芳賀猛	生命倫理	1
小松美彦	科学技術リテラシー論 II	2
石原考二	応用倫理学概論	2

原典を読む

◇教員◇

柳原孝敦、大宮勘一郎

「原典を読む」は、東京大学の全ての学部の学生を対象に、日頃から関心は持ってはいてもなかなか紐解く機会のない、古今東西の古典や重要文献を講読形式で味読することを目的に開かれています。これを機に、一行一行をじっくり解釈しながら読み解いていく快楽を味わってみてください。

この科目は、もともとは 2001 年度までの「外国文学講読」を発展させたもので、文学部が専門課程における教養教育の一環を積極的に担うこと、具体的には理科系ないし社会科学系の学部に在籍する学生諸君に、外国文学の講読を通じて幅広い人間教育を行うことを目的にしていました。もちろん、文学部の学問は、外国文学だけに限られているわけではありません。哲学、思想、歴史、社会学や心理学などの幅広い分野が研究対象です。しかも、そこに共通するのは、それらの学問の基本が広義の文献学、すなわちテキストの解読であることです。そこで、2002 年度からこの科目の開設を文学部全体に広げ、名称も「原典を読む」に改めることにしました。したがってここに言う「原典」とは外国語文献だけでなく、日本語文献や時には翻訳文献も含まれることになります。

テキストの解読は決してたやすいことではありません。日本語文献であっても、「日本語なのだから、読めばわかるだろう」式の安易な姿勢で接すると、大きな間違いをしでかします。テキストを解読するには、一定の方法に従いながら、きちんと筋道を立て、その上で内容を解釈していく地道な作業が求められます。そうした作業を実践的に学んでいくことが、ここでの目標になります。慣れないうちは面倒と感じるかもしれませんが、はまり込むとそれが愉悦に変わります。文学部の学問の楽しさはそこにあります。教員との人間的な触れあいが得られるのも、この科目の魅力といえます。担当するのは、すべて文学部の専任教員です。少人数向けというのが原則ですから、ずいぶんと贅沢なことかもしれません。マスプロ授業の経験しかない諸君は、ぜひ一度こうした手作りの授業を味わってみてください。

なお、以上のような趣旨で開設される科目ですので、文学部所属の学生諸君は聴講に制限のある場合があります。詳細は、授業を担当する各教員に確認してください。

参考までに、本年度の「原典を読む」開講科目を列記しておきます。

「マリオ・バルガス=リョサ『ケルト人の夢』を読む」(柳原 孝敦)
「エルンスト・ユンガーの散文を読む」(大宮 勘一郎)

アカデミック・ライティング

◇教員◇
Catherine Dale、David Taylor、中邑啓子

インターネットの普及等により、学術研究の成果の共有が時空を超えて瞬時にできるような時代が到来しています。学術研究における国際化の流れのなかで、母語が異なる世界中の人々と共通の基盤を持ち、情報を公開し合い、相互理解に基づく批判的な検討や質疑応答が学術研究を進展させる大きな推進力になっています。このような状況の中で、今後学術研究の一端を担おうとするためには、それなりの能力の養成がこれまで以上に必須となります。

2002 年度より、学術研究の成果を今や世界の共通語である英語を使って広く国際社会に公開できる能力の養成をめざして、人文社会系研究科・文学部では、学部・大学院共通で半期 2 単位の「アカデミック・ライティング」という授業が新たに開講されています。受講生のレベルを考慮し、年度を重ねて開講科目が整備され、2005 年度からは、学術研究への意欲を持つ学部学生の基礎力養成を目指す「Academic Writing I, II (Introductory)」、大学院・学部共通で、基礎力の向上を目指す「Academic Writing III, IV (Intermediate)」、学術研究の成果が公表できるような能力の発展を目指す大学院専用の「アカデミック・ライティング 1, 2（上級）」というようにレベル別に授業が開講されています。手紙や伝言等を含む日常生活にかかわる比較的短い文章や調査報告や研究概要等を含む研究レポートの作成が英語で書けるような能力が修得できていないと思われる学生は、まず共通講義の「英語後期（Writing, Speaking）」を受講して基礎力を十分に養成してください。そのような基礎力の裏付けがあることが、「アカデミック・ライティング〔英語〕」を受講するための前提条件となっています。

授業は、(1) 学術論文の構成等に関する講義、(2) 受講生による論文の作成および口頭発表、(3) 受講生同士による発表論文についての討議、(4) 教員による批判的講評という形態で進められ、これらはすべて英語で行います。特に(2)については、与えられた課題について小論文を数回作成し、そ

れらについて(3)、(4)の過程で学んだことに基づき、学期末には受講生が専攻する分野での研究の成果を学術論文として作成し、実践的能力の養成に努めます。1 クラスの受講者数が 20 名を超えるとこのような形態の授業は効果的に行うことができないので、受講希望者は、上記の要件を満たしていることを前提として、初回の授業の折に、担当教員が面接等を行って受講者を決定します。受講機会の均等化を図るため、当該年度に受講できるのは原則 1 クラスのみとします。

なお、大学院のみの科目ですが、フランス語とドイツ語、中国語の授業も開講されています。